

福村虎治郎の言語観の回顧

對馬 康博

0. はじめに¹

本稿では、福村虎治郎(北海道大学名誉教授)の主著3部作(『英語学論集』(篠崎書林)・『英語と英語学』(大修館書店)・『英語態(Voice)の研究』(北星堂書店))を通じて、福村の言語観を回顧し、現代言語学の視点から読み直すことを主たる目的とする。具体的には、この3部作の中では、特に、伝統文法、構造主義言語学、変形生成文法が触れられているが、本稿では、出来る限り「意味」に関する記述に注目し、現代言語学理論のひとつである認知言語学(特に、認知文法)の言語観との比較を通じて、福村の言語精神を紐解いていく。本稿の構成は以下の通りである。

(0) 本稿の構成: 第1節: 意味観をめぐって

第2節: 品詞論をめぐって

第3節: 主観性・主体性と言語化をめぐって

第4節: 理論観をめぐって

第5節: 総括

第6節: 結語

1. 意味観をめぐって

まず、福村と認知言語学の意味観を考察することから始める。1.1節では「言語観」として意味と形式の対応関係について、続く1.2節では「意味観」について概観する。1.3節は意味観のまとめである。

1.1 意味と形式の対応関係

はじめに、福村と認知言語学の「言語観」について考察する。特に、注目す

べきは意味と形式の対応関係についての指摘である。次の(1)の福村の文法観と(2)の Bolinger のものを見よう。

- (1) 我々は文法とは意味と形態との関係、意味が同じであれば形態も同じ、意味が違ふと形態も違ふという、意味と形態との間に於ける相等相異の関係であるとする。

(下線は對馬による、以下同様)(福村 1998 [1965]: 7)

- (2) one form for one meaning, and one meaning for one form

(Bolinger 1977: x)

福村は早くも 1965 年に(1)の下線部の記述の通り、意味と形式の対応関係を指摘していた。いみじくも変形生成文法を唱えた Chomsky の著作 *Aspects of the Theory of Syntax* が出版されたのも同年であるわけであるから、福村はいち早く意味を擁する立場を取っていたことになる。これに並行して、Bolinger (1977) は認知(・機能主義)言語学の萌芽とみることができのだが、(2)の引用のように「意味が違えば形も違ふ、形が違えば意味も違ふ」という趣旨の有名なフレーズを残している。² このように、福村の言語観と創成期の認知言語学の発想は酷似したものになっていることは注目に値する。

次に、記号観について、恣意性という観点から考察する。まず、福村の記号観として(3)の引用を見よう。

- (3) a. 言語は意味と形態から成立っていることは常識的なことである。またこの意味と形態との結びつきは、相対的には恣意的であることは、これも一般的に認められている。[...] さてこれらを前提とすると、たとえ便宜上意味と形態を別々に研究対象としても、また時代によってどちらか一方がより多く研究されるとしても、そのためにどちらか一方が他方より軽視されてよいということにはならない。

(角括弧内は對馬による、以下同様)(福村 1977: 155)

- b. 言語は記号の一種として意味と形態から成立することには異存がないことと思われる。

(福村 1989: 1)

この引用からすると、福村の記号観としては、形態と意味の結びつきからなる「記号」の一種であり(cf. (3b))、形態と意味の関係は「恣意的」である(cf. (3a))ということになる。

他方、認知言語学、特に認知文法と呼ばれている理論の記号観について確認したい。次の(4)の引用を見よう。

- (4) a. Grammar (or syntax) does not constitute an autonomous formal level of representation. Instead, grammar is symbolic in nature, consisting in the conventional symbolization of semantic structure.

(Langacker 1987: 2)

- b. Language is symbolic in nature. It makes available to the speaker—for either personal or communicative use—an open-ended set of linguistic **signs** or **expressions**, each of which associates a semantic representation of some kind with phonological representation.

(ibid.: 11)

- c. [...] the arbitrary character of linguistic signs is easily overstated [...]. An obvious but seldom-made observation is that any polymorphemic linguistic sign (this includes the vast majority of expressions) is nonarbitrary to the extent that it is analyzable.

(ibid.: 12)

認知文法では、(4a, b)の下線部のように、言語というものを本質的に形態と意味が結びついた「記号」として扱う。つまり、統語の自律性を否定し、言語を

形態と意味が概念的に結びついたもの（「概念的統一(theoretical unification)」(cf. Langacker 1990: 341))として、「記号的文法観(symbolic view of grammar)」の姿勢を取る。さらに、認知文法では、記号化そのものを人間の経験的基盤や認知の営みによる動機付けがなされている(motivated)ものとして考えており、形態と意味の恣意性に関しては完全に恣意的ではないことを唱っている。ここでは、語(word)と音の結びつきについて、特に、語形成に関わる形態素の事例をみよう。³ 語形成には「分析可能性(analyzability)」に関わる統合過程(integration)の「合成構造(composite structure)」や「成分構造(component structure)」が関与する。特に分かりやすい例として、形態素レベルでは、ある表現がある部分にまで分解できるという意味で分析可能であり、その形態は意味づけの観点から動機付けられていることになる。例えば、形態素レベルで V + -er というものは、-er 形態素自体に「～するもの・人(“something that does”)」という意味を容易に想像できる。具体的には、合成構造 *complainer* は成分構造 *complain* + -er に分析でき、*complain* (不満を漏らす)に-er (～する人)が合成されたもので、「不満を漏らす人(“someone who complains”)」という意味が生まれる。このような分析可能性が高い事例は形態と意味が完全に恣意的ではないことを示す事例である。⁴ また違う事例として、オノマトペ(onomatopoeia)は形態と意味が結びついたものとして類像的(iconic)な関係にあることは明白であり、意味づけという人間の認知の営みによって動機付けられていることは明らかである。

以上のように、福村の形態と意味の関係は「記号的+恣意的」ということになるが、他方、認知文法は「記号的+形態と意味は完全に恣意的ではない」という帰結が得られる。

1.2 意味観

次に、両者の意味観について考察する。まず、(5)の引用を基に福村の意味観から考察しよう。

- (5) a. ここではそれ[=意味]を言語行為をなす人間の心的作用であると見做す。したがって人間に共通に認められる普遍的な(universal)心的作用によって初めて存在可能である[...]。

(福村 1989: 1)

- b. 意味的機能は人間に共通に認められる人間の知覚によく対応するものであるが、これに反して統語的機能は言語によって異なることが可能である。

(ibid.: 2)

- c. 言語の意味と形態は互いに作用しあって一つの纏まりをなし、この纏まりでもって我々の日常の心的経験の記号となっている[...]。この経験は外界の事情に誘われるものであるが、結局我々がこの外的な事情を内的に意識しなければ、これらの経験は成立しないものである。このような心的経験を言語以前の本来の心的作用とする。そして言語の意味のうち本来の意味はこの本来の心的作用に対応するものである。この本来の心的作用は人種や年齢に関係なく同一である。我々の心的作用は原則として実体に向う作用であり、その実体を「ある属性を有するもの」、「ある動作をなすもの」と意識する。又他の実体との種々な関係において意識する。[...] これら種々の意識即ち表象の結合の仕方が人間一般に共通なのである。

(福村 1977: 8)

- d. 現実の言語には、知覚やそれに対するの判断作用に直接関係する普遍的(universal)な意味要素はあるが、その他に社会や文化の違いによって異なる特殊な意味要素も存在しているのである。このような現実の個々の言語の特殊性に内部言語形式が重要な役割を果たしている。そういう意味では内部言語形式の存在は言語の普遍的特質であり、それは後代の「Sapir-Whorfの仮説」とも関連すると考えられる。

(福村 1989: 153)

福村は(5a-c)の通り、意味というものを人間の心的経験としての心的作用や知覚作用に対応するものとして規定している。ここでいう「心的作用」とは中島文雄博士の考えを継承したものだと考えられる。ここで、中島のいう心的作用と言語、特に意味との関係を考察したい。

- (6) a. 言語手段の意味とは、話手の側からいへば、自分が聴手の中に喚起せんとする心的現象、その言語手段が聴手の中に喚起することになつてゐる心的現象であると定義することができる。この心的現象喚起のはたらきが言語手段の機能と呼ばれるものである。一方聴手の側からいふと、意味とは言語表現を理解した場合の心的状態の内容のことであつて、我々が常識的に意味と呼んでゐるものは要するにこれを指してゐると思はれる。

(中島 1939: 6)

- b. 言語手段は單に主觀的直接的機能によつて話手の心的生活を告知するのみならず、間接的にはそれに対応する心的状態を、聴手の中に喚起しようとする意圖を一次的に含んでゐる。この間接的機能及びかの喚起されるべき心的状態の内容を、我々はその言語手段の意味と名づける。あるひは前者を意味機能、後者を單に意味と呼んで區別してもよい。

(ibid.: 7)

まず、中島のいう心的現象とは精神活動そのものを表すものであり、その下位区分としてブレンターノ(Brentano)のいう「表象」・「判断」・「情意」に分けられるものである。そして、(6)の引用から明らかなように、中島は言語行為を行う人間の心的作用そのものを意味と結びつけて考えているわけである。こうした系譜が福村の意味観にもみられるわけである。さらに踏み込んで、福村は(5d)のように言語形成はフンボルト(Humbolt)のいうところの「内部言語形式(innere Sprachform)」に対応するものであるという。内部言語形式の精神は(7)にまとめられる。

- (7) [...] 言語は、言語生産に当たって精神が自発的に対象について構築した概念、それを表出するものなのである。

(フンボルト 1984: 143)

簡素に言えば、言語形成というものが人間という主体の精神活動によって支えられているという精神である。以上のように、福村の意味観は中島やフンボルトの精神を受け継いだものであるということは明らかである。

次に、認知文法の意味観について考察する。(8)の引用をみよう。

- (8) a. Language is an integral part of human cognition. An account of linguistic structure therefore articulate with what is known about cognitive processing in general [...]. [...] we have no valid reason to anticipate a sharp dichotomy between linguistic ability and other aspects of cognitive processing.

(Langacker 1987: 12)

- b. Grammar (like lexicon) embodies conventional **imagery**. By this I mean that it structures a scene in particular way for purposes of linguistic expression, emphasizing certain facets of it at the expense of others, viewing it from a certain perspective, or construing it in terms of certain metaphor.

(ibid.: 39)

- c. Remarkable [...] is the extent to which an expression's meaning depends on factors other than the situation described. On the one hand, it presupposes an elaborate **conceptual substrate**, including such as matters as background knowledge and apprehension of the physical, social, linguistic context. On the other hand, an expression imposes a particular construal, reflecting just one of the countless ways of conceiving and portraying the situation in question.

(Langacker 2008: 4)

- d. An expression's meaning is not just the conceptual content it evokes—equally important is how that content is construed. [...] In a viewing a scene, what we actually see depends on how closely we examine it [=specificity], what we choose to look at [=focusing], which elements we pay most attention to [=prominence], and where we view it from [=perspective].

(ibid.: 55)

(cf. To the extent that **conception** and **perception** are analogous, I use the term **viewing** for both [...]. (ibid.))

認知文法では、(8a)の通り、言語は人間の認知(cognition)、特に認知の営み(cognitive processing)の中にあるとする。この文法観では、特に、言語能力(linguistic ability)と認知の営みを明確に区別しない。つまり、認知文法では、人間が言語行為を行う際、言語に特化した脳を活性化させているのではなく、知覚や記憶などの一般的な認知能力を活用した認知の営みによって動機付けられているという立場を取ることになる。具体的には、(8b-d)の通り、「イメージリー(imagery)」、すなわち、事態をどう捉える(construe)のかという「捉え方(construal)」が言語に反映しているわけである。捉え方というものの中には、(8d)の通り、状況をどのくらい精密に捉えるのかという「詳述化(specificity)」、どこに焦点を当てるのかという「焦点化(focusing)」、どの要素に注目するのかという「際立ち(prominence)」、どの立ち位置から観察しているのかという「観点(perspective)」などが含まれる。

以上のように、福村の意味観も認知文法のものも人間の心的作用や認知の営みという心の働きから意味をアプローチするという点で共通点が見受けられる。さて、そうした心の働きは、人間に普遍的なものなのだろうか？また、もし普遍的だとしても、民族や社会情勢によって異なるものなのだろうか？まず、(9)で挙げられている福村のものから考察しよう。

- (9) a. 我々は事象に対する時同じく人間として本質的には同じ心的作用を起こすと考えられる。たとえ社会状況や自然の環境などの違いによって表象や判断の内容に違いがあろうとも、それら表象の成立過程やその結合の仕方、判断の仕方または種類は同じ筈である。

(福村 1998: 10)

- b. ここではそれ[=意味]を言語行為をなす人間の心的作用であると見做す。したがって人間に共通に認められる普遍的な(universal)心的作用によって初めて存在可能である[...]。

(=[5a]) (福村 1989: 1)

福村は、(9a, b)の引用の通り、心的作用はどんな人間にとっても普遍的なものであると考えている。

他方、認知文法の認知の営みについて、(10)の引用を通じて、考えてみよう。

- (10) There is of course no question that people have the capacity to learn a language, and that this involves innate structures and abilities. What is controversial is whether some of these structures and abilities are unique to language, possibly constituting a separate module package with special properties not reflective or derivative of other, more general functions. In my opinion, a convincing case has not yet been made for unique linguistic functions. [...] [...], once the many layers of artifacts are removed, language starts to look much more natural and learnable in terms of what we know about other facets of human cognitive ability.

(Langacker 1987: 13)

まず認知文法を提唱するラネカーは、人は言語を習得する能力を持っており、この中には生得的(innate)な機構や能力が含まれていることを認めている。しかし、これらが言語に固有の機構であるかどうか、つまり、言語に特化した能力

や脳機構があるかどうかについては、懐疑的である。ラネカーはむしろ、人間のもつ一般的認知能力の点から言葉を見る方が自然であるという立場を擁している。言い換えれば、人は言語に特化していない一般的認知能力については普遍的に保持しており、それらの共働によって、言語を習得し、運用していると考えているわけである。

このように、福村と認知文法では、心の働きに関する心的作用や一般的認知能力に基づく認知の営みは普遍的(universal)に存在していることが窺い知れる。

それでは、ことばの意味を心の働きから規定しようとする両者は、意味というものをどのように蓄積していると考えているのだろうか？まず、福村の立場から考察しよう。

- (11) さて言語の意味を事象に対応する心的作用とすると、それには種々の要素が混じっていると思われる。事象は同じ性質のものの繰り返しもあればまた似通ったものもある。繰り返される同じ事象に対しては同じ言語的意味となり、似通った事象も言語の意味において似通ったものになる。ここに抽象作用が働いているのであり、人間特有の知性のために自然にそうになっているものと思われる。

(福村 1977: 158)

福村は、(11)の引用の実線部の通り、繰り返される使用によって、意味が同じくなったり似たりすると考えており、ここには抽象化というプロセスが関与していることを述べている。また、(11)の波線部の通り、こうした抽象化は人間の知性、つまり、人間の認知の営みとして普遍的なものであることを述べている。他方、認知文法の立場を考察しよう。

- (12) a. Substantial importance is given to the actual use of the linguistic system and a speaker's knowledge of this use; the grammar is held responsible for

a speaker's knowledge of the full range of linguistic conventions, regardless of whether these conventions can be subsumed under more general statements. A nonreductive approach to linguistic structure that employs fully articulated schematic networks and emphasizes the importance of low-level schemas.

(Langacker 1987: 494)

- b. [...], abstraction, is the emergence of a structure through reinforcement of the commonality inherent in multiple experiences. [...] A *schema* is the commonality that emerges from distinct structures when one abstracts away from their point of difference by portraying them with lesser precisions and specificity.

(Langacker 1999: 93)

まず、認知文法では、(12a)で概略が述べられているように、言語体系の実際の「使用(use)」とこの使用に関する「話者の知識(a speaker's knowledge)」が重視される。換言すれば、言語の知識は実際の使用から蓄えられ(cf. “a structured inventory of conventional linguistic units” (Langacker 1999: 98))、その蓄え(inventory)を利用して話者はさらなる言語使用や新規の表現に対処するという姿勢をとるわけである。こうした立場は「使用依拠モデル(Usage-Based Model)」と呼ばれる。このモデルでは、トップ・ダウン式(“top-down”)に一般的規則を過度に導いて、例外を規則に含まずリストとして別記する「規則とリストの誤謬(rule / list fallacy)」を排斥する(Langacker 1987, 1999)。むしろ、ボトム・アップ式(“bottom-up”)に事例を重視し、そこから「スキーマ(schema)」と呼ばれる共通性を取り出し、言語知識をネットワーク状に蓄えていくというアプローチを取る。もちろんこのプロセスの中には、(12b)の引用の通り、「スキーマ化(schematization)」と呼ばれる「抽象化(abstraction)」が重要な役割を果たし、この抽象化の度合いによって、規則の抽象度が異なる。このようにして言葉の知識が蓄積されていくわけである。ただし、我々を実際に言葉を使用する際に、

必ずしも抽象度の高い知識を使っているわけではないことに注意を払う必要がある。例えば、ラネカー(1999)では、二重目的語構文の例として、“V NP NP”のようなかなり抽象化が進んだ高次のスキーマ(cf. スーパー・スキーマ(super schema))は実際の使用では活性度は低く、むしろ“give NP NP”や“give me NP”といった抽象度が低い低次のスキーマの方が活性化しており、使用頻度が高い旨を述べている。いずれにせよ、人間は認知の営みを反映する記号構造としての言語をボトム・アップ式に抽象化していくという一般的認知能力を普遍的に有していることは明らかである。

以上のように、福村と認知文法では、意味やそれを反映する記号構造としての言葉の知識の蓄えには「抽象作用」や「抽象化」という人間に普遍的な能力が関与していると考えているわけである。

1.3 意味観のまとめ

以上、第1節では意味観を中心に福村と認知言語学、特に認知文法の言語観を比較してきたが、これらは表1にまとめられる。もちろん全て一致するわけではなく、違いもあるものの、多くの共通性があり、基本精神は似た背景を持っていることが分かる。

	福村の言語観	認知言語学(認知文法)の言語観
形と意味	形と意味のペア(記号的)	形と意味のペア(記号的文法観)
記号の恣意性	強い恣意性	弱い恣意性(cf. 動機付け)
意味	心的作用	認知の営み
普遍性	心的作用の普遍性	一般的認知能力による 認知の営みの普遍性
意味の抽象化	抽象作用	抽象化(スキーマ化): 使用依拠モデル

表 1

認知言語学、特に認知文法が台頭してきたのは 1980 年代のことであるから、福村はそれよりも以前から、このような意味観を展開していたということが帰結として得られる。

2. 品詞論をめぐる

第 1 節では、意味観をめぐる、福村のものと認知言語学、特に認知文法のものを比較したが、第 2 節では、品詞論を考察の対象として議論を進めていく。

2.1 品詞論

品詞論をめぐる、まずは福村の概念からみたい。(13)の引用をみよう。

(13) a. 品詞に関しても 2 つの見方が可能なのであって、品詞は「言語」に属し、主語・述語・目的語・補語等は「言」に属すと考えられる。

(※「言語」=Saussure の Langue, 「言」=Parole に相当)(福村 1977: 38)

b. かくして語の品詞を決定するにはこのように他の語との機能関係をしらなければならない。ところがこの機能関係は言語的なものであるから言語によって異なり得る。しかしこの機能も結局は人間の心の働きである以上、人間に本来的に具わっている心的作用に基づいている。

(福村 1977: 42)

c. 例えば, his dog と言えるように his arrival と言えるし, his dog is... と同様に his arrival is... と言える。同様に the house of snow と言えるのと同様に the whiteness of snow と言える。[...] 上にあげた his arrival is... や the whiteness of snow is... は he is... や snow is... と比較すると直接的には本来的意味を喚起しない。独立した arrival とか whiteness そのものだけを我々は考えることが出来ないのである。しかしこの arrival と his や is との言語的關係は dog においては本来的

に矛盾なく成立するのである。従って品詞分類の基準である機能関係も本来の心的作用に基づいているのである。ところが本来的な関係は当然本来的な物に表れるものであるから、分類された品詞も本来的な物またはその関係に対応し得る。例えば、我々が心理作用をなす時、必ず何かある物に向う。その物の名が名詞であり、その物の動作を表すものが動詞であり、属性を表すものが形容詞であり、動作の様態を表すものが副詞であり、物と物との関係を表わすものが前置詞及び接続詞である。又感情に激した時などの叫び声を表わすものが間投詞である。このような本来的な心理作用による分類は品詞の分類に対応する。しかしこの対応関係が時にはずれているのである。言語は本来的には同一ではないものをあたかも同一であるかのように把握しそのように取り扱うのである。そして言語的にいかに取り扱われているかを知るには(例えば上の arrival や whiteness が dog と同じように取り扱われることを知るには)結局手掛りは他の語との関係即ち機能的意味によらねばならないのである。従って結局品詞分類の基準は他の語との間に見られる関係である。

(福村 1977: 42-43)

まず、(13a)の引用の通り、福村は品詞がソシュール(Saussure)のラング(Langue)の問題、平たく言えば、言語知識の問題であるという基本姿勢を打ち出している。その上で、(13b, c)の通り、福村は品詞を決定するのは、他の語との機能関係、すなわち運用面から規定されるべきだという立場を取っている。さらに、福村はこの機能関係は人間の心の働き、つまり、福村のいう心的作用から支えられているという観点から考えている。具体的には、福村によれば、名詞というのは、心的作用が関与する時、物に向かい、その物の名が名詞であると規定する。動詞はその名詞となる物の動作を表すものであり、その名詞の属性を表すものが形容詞であるという。副詞は動作を表す動詞の様態を表すものということになる。また、前置詞や接続詞は物と物の関係を表す語と定義される。こ

のように、福村は品詞が基本的には言語知識の問題であるとしながらも、機能関係を支える人間の心的作用によって規定されることを表明している。

他方、認知文法では、品詞は(14)の通り、概念内容そのものにあるのではなく、「プロフィール(profile)」にあると規定される。

- (14) [...] Profiling is crucially important for the flowing reason: **what determines an expression's grammatical category is not its overall conceptual content, but the nature of its profile in particular.**

(Langacker 2008: 98)

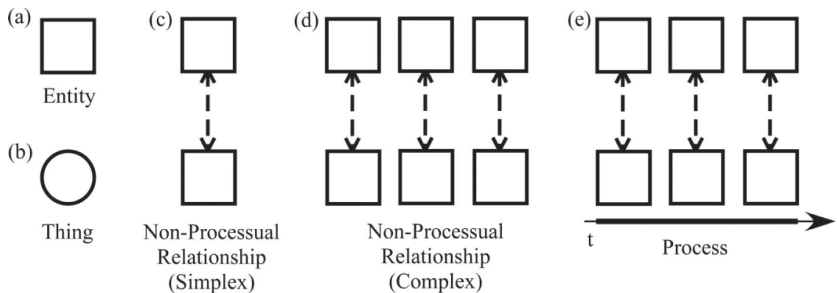
プロフィールとは、人間の認知の営みである捉え方(construal)のひとつの「際立ち(prominence)」の現象のことであり、自らが見ているもしくは頭の中で描いている状況の中で、際立っている要素のことを指す。特に、最も際立っているものはトラジェクター(trajector, tr)、次に目立っている要素はランドマーク(landmark, lm)という用語を用いて区別する。これにしたがって、各品詞について(15)の引用と図1及び2で考察しよう。

- (15) a. [...] we will use the term **thing** for a conceptual unit that is expressed in language as noun. Things appear in our conceptual world as autonomous, or independent, conceptual unit that have a certain stability in space and time.

(Radden and Dirven 2007: 42)

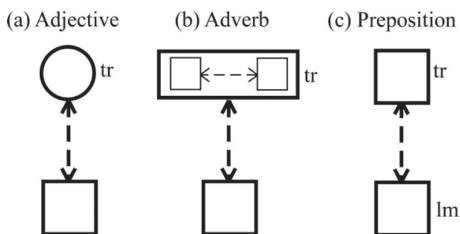
- b. Relations are dependent conceptual units that link two or more things and tend to be short-lived, i.e. have lower degree of time stability than things. Relations are expressed as verbs, adjectives, adverbs, prepositions, and conjunctions.

(ibid.)



(Langacker 2008: 99)

図 1

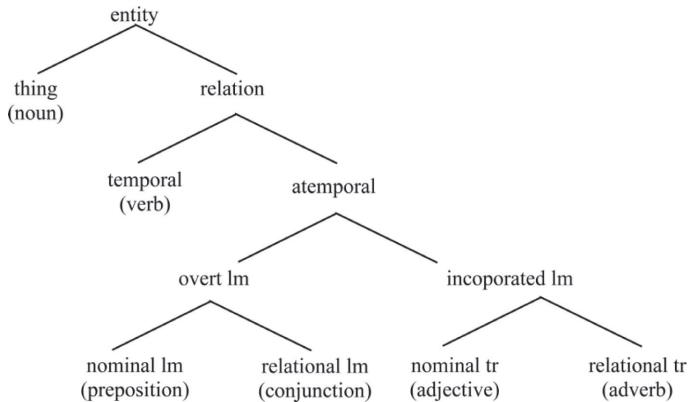


(ibid.: 116)

図 2

まず、図 1 の中で、図 1(a)の実体(entity)と呼ばれるものがあるが、これは、モノ(thing)やコト(relation)を総体的に表すものである。次に、(15a)が名詞の定義であり、それを図式化したものが図 1(b)である。福村同様に、名詞はモノ(thing)として規定され、概念的に自律的(autonomous)であり、空間的・時間的な安定性(stability)を持つものとされる。次に、動詞・形容詞・副詞・前置詞・接続詞の規定である。これら全てに共通することは、(15b)で述べられているように、2 つ以上の実体が結びつく概念的に依存的(dependent)な関係(relations)を表すということである。関係は全般的にモノよりも時間的な安定性が低く、時間の流れによって変化しやすいものである。この概略は図 1(c-e)に描かれている。特に、動詞は図 1(e)で描かれているように、関係の中でも時間の流れに沿ったプ

ロセスを表す。他方、形容詞は図 2(a)に描かれ、最も際立つ tr としてのモノとの何らかの関係(e.g. 属性)を表す。また、副詞は図 2(b)のように、最も際立つ tr としての実体(特に動詞などの関係)との何らかの関係(e.g. 容態)を表す。さらに前置詞は tr と lm としての実体(特に名詞などのモノ)との何らかの関係(e.g. 空間関係や時間関係など)を表す。接続詞は tr と lm としての実体(特に関係)間の関係(e.g. 空間関係や時間関係など)を表現する。以上の品詞の概略は系統的に図 3 の枝分かれ図で示される。

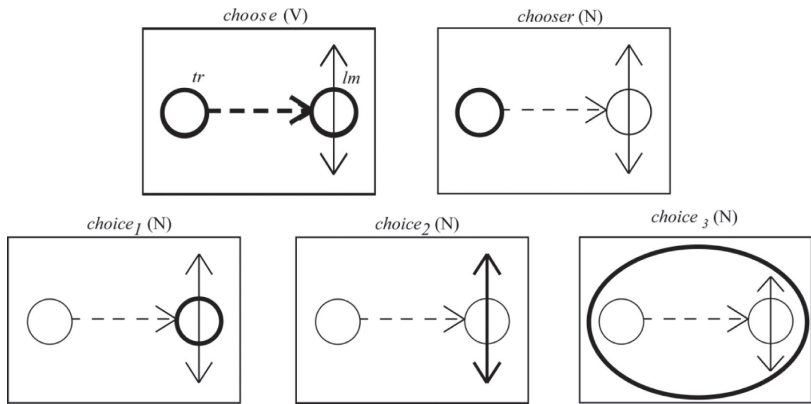


(Taylor 2002: 221)

図 3

具体例として、動詞 **choose** と名詞 **choice** について、図 4 と共に考察したい。まず興味深いことは、ラネカー(2008)が述べるように、これらの意味は概念内容そのものにあるのではなく、捉え方の過程、つまり、概念化(*conceptualization*)にあるということである。図の太字はプロフィールを表しているが、全てに共通することは、選択者(左円)、選択物(右円)、選択するというプロセス(左円から右円に伸びる破線矢印線)、選択肢(右円を貫通する両向き矢印線)という概念内容の部品が同じであるということである。つまり、これらは概念内容は同じだが、その捉え方としてのプロフィールが異なり、これがこれらの意味の差を

生み出しているということになる。動詞 **choose** では、選択者が **tr** として、選択物が **lm** として言語化され、さらに選択するというプロセスがプロファイルされている。一方、名詞 **chooser** では、選択者だけがプロファイルされている。また、**choice₁** は「選択された物」という意味でそれだけがプロファイルの対象となっている。さらに、**choice₂** では、「選択肢」という意味で、選択の範囲だけが焦点化されている。最後に **choice₃** では、「選択(すること)」という意味で、それぞれのパーツを全て囲む形で具現化(reification)、つまりモノ化され、それがプロファイルされている。



(Langacker 2008: 100)

図 4

以上の考察から明らかなように、福村の品詞は基本的には言語知識の問題であるとしながらも、機能関係を支える人間の心的作用によって、そして認知文法のそれは人間の認知の営みである捉え方、特にプロファイルの観点から規定されることになる。どちらも心の働きから規定しようとする立場を擁しているわけである。

2.2 品詞論のまとめ

以上、品詞観をめぐって、福村のものと認知言語学、特に認知文法のものを中心として対照して考察したが、このことは表2に集約される。

	福村の言語観	認知言語学(認知文法)の言語観
品詞の定義	心的作用から規定	認知の営み(捉え方)から規定

表 2

両者には、概念内容そのものに品詞が存在するのではなく、心的作用の観点や人間の認知の営みである捉え方、特にプロファイルの見地という人間の心の働きの立場から規定するという共通点がある。しかしながら、認知文法の方は、捉え方としての際立ちをプロファイルと呼び、トラジェクターやランドマークという概念を用いて詳述しているなど、テクニカルな細かな点で違いも見られる。

また、第1節の帰結と同様に、福村は認知言語学の誕生以前から、このような品詞観を抱き自らの論を展開していたことになる。

3. 主観性・主体性と言語化をめぐって

前節では、品詞論をめぐって考察を進めてきたが、本節では、主観性・主体化と言語化をめぐって、福村の概念と認知言語学、特に、認知文法と中村(2009, 2012, 2015 等)の概念とを対比し、共通点と相違点を探る。

3.1 主観性・主体性と言語化

主観性・主体化と言語化をめぐって、まずは福村の主観と客観という概念から確認しよう。

- (16) a. 我々が生活中に於てある行動を起こすときには、何かしらある情意作用が起こっているのである。言行為の場合も同じである。このよ
うなときの場面は客観的・觀察的に認められる外的な対象やまたは
周囲の事物や状況即ち心理学者の言う地理的環境と密接な関係を
保ってはいるが、それと区別されなければならないものであり、心
理学者が行動的環境と呼んでいるものに相当する。[...] 我々が行動
するときは同時に第一の場面にもあり第二の場面にもあるが、直接
に行動に関係しているのは第二の場面である。この第二の場面は前
に述べた知覚内容を基にしているがそれと同じではなく、それから
言語的把握作用の生ずるところの、外的事象と内的事象の相互作用
による主客を融合したものである。さてこれら第一・第二両場面中
に於てその一部分としての行為者を中心とした場面が認められる。
第二の場面内ではその行為者は時枝氏の言われる主体である。この
主体中心の場面は主客融合した世界である故極めて具象的で、情意
的である。

(福村 1998: 53) ⁵

- b. [...]行動は直接には上の第二の場面に於て行われるのである。従つ
て言行為も直接にはこの第二の場面で行われる。しかしこの第二の
場面を觀察的にみればその性質が第一の場面の性質と極めて離れ
ていることもあり、また両場面の性質が極めて接近していることも
ある。換言すればその行動の主体として極めて主観的に情意的な場
面を構成する人と、即物的に極めて客観的に論理的な場面を構成す
る人がいる。さてこのような種々様々な第二の場面中の一部である
主体中心の場面が遠心的並びに求心的感じ方の中心である。動作が
この主体中心の場面で行われまたこの場面に向かう場合求心的に
感じられるのであり、この場面から出て他に向かう場合遠心的に感
じられるのである。

(福村 1998: 53-54)

まず、(16a, b)でいう第一の場面とは「地理的環境」に、第二の場面は「行動的環境」に対応すると思われる。特に注目すべきは、行為というのは第二の場面で展開され、言語行為もそこで行われるということであり、人間という「主体」中心の場面であるということである。福村は、この主体というのは時枝誠記のいうものと合致する旨を述べているが、これは、(17)の引用の通り、時枝文法という「言語過程説」の中でいうところの主体に値すると思われる。

- (17) [...] 言語過程説は、言語を、人間行為の一として観察し、すべてを、言語主体の機能に還元しようとする学説である。言語学は、久しい間、言語を自然科学的類推において、それ自身、生活する有機体の如く見て来た。ソシュールは、言語を、概念と聴覚映像との結合体とし、それは脳髄中に所在を求めることが出来る心的实在体であるとした[...]。しかしながら、そのような心的实在体としての言語の人間に対するありかたも、結局において、自然の人間に対する関係と、異なるところがなかったのである。言語学を、自然科学に近づけることは、厳密な法則定立のためには、プラスとする面もあったであろうが、そのために言語の実際的な面に、目を覆わしめた事実のあることは、否定することはできないのである。

言語過程説は、言語において、人間を取り戻そうとするのである。
言語は、その本質において、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間的事実の中において、人間的事実との関連において、これを観察するということである。

(時枝 2008: 20)

簡素に言えば、時枝は人間中心の主体に重きを置き、言語行為は言語主体の主体的経験であることを唱っている。つまり、言語は主体の心の働きの観点から観察されなければならないという趣旨のものである。

また、(16a)の中で、福村は主体中心の場面は「主客融合した世界」であるということを述べているが、これは特筆に値する。この世界観に関して、福村の記述の中には、著者が調べた限りにおいて、詳述したものが見当たらないが、(18)の引用の西田幾多郎の『善の研究』の「主客未分」という概念や、(19)のジェームズの『根本的経験論』の「純粹経験」というものが参考になると思われる。

- (18) 経験するというのは事実そのままに知るの意である。まったく自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。[...] それで純粹経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主も客もない、知識とその対象とが全く合一している。これが経験の最醇なるものである。

(西田 2006: 30)

- (19) もし初めは渾沌状態にある多くの純粹経験が、だんだんと秩序だった内部世界と外部世界へと分化していくさまを、進化論的に構成することができたとしたら、その理論全体は、かつては能動的だった経験の性質が能動的でなくなり、ある場合には活力的な属性であったのに、別の場合には活力のない、あるいは内的な「性質」の状態へ移っていくさまの、あるいはその理由の説明を成功させることになるだろう。

(ジェームズ 1998: 41)

西田によれば、主も客もない状態、すなわち「主客未分」の状態にあることが直接的な経験であり、このような生の経験状態を「純粹経験」と呼んでいるわけである。また、ジェームズによれば、純粹経験は「混沌状態」にある旨を述べており、これは主体と客体が混沌とした状態、すなわち、西田哲学の主客未分の状態にあることと同一の意味をなす。さらに、ジェームズはこの混沌とした主客未分の状態から、内部世界と外部世界へ分化していくと述べているわけであるから、主体と客体が分かれていくということを述べていることになる。

つまり、両者の観念をまとめると、主客未分の状態から主客分離への移行過程があるということになる。

再び、福村の言語観に戻ろう。(16b)では、主体は主観的に場面を構成する人と客観的に場面を構成する人がいるということが述べられているが、これは主観性と主体性に関する重要な記述となる。すなわち、このことは、場面の把握の仕方には主観的に把握する方法と客観的に把握するものがあるということの意味する。福村の(16a)の「主客融合の世界」と西田哲学・ジェームズのものの関連を考えると、主客が融合した主客未分の世界を基本とし、主客分離した世界へと移行し、そこで主観的把握と客観的把握が行われるということの意味する。このことは、後の認知文法の主観性と主体性で確認するように、西洋哲学的な主客対峙を原始状態と想定するものとは一線を画すことに注意されたい。

さて、このような主観性・主体性を考える福村は、これと言語化の関係に関して、(20)の引用のように述べている。

- (20) [...]主體的な場面は一回的なものであるがしかしそれを言語に表現する場合は、いかに主體的なものであっても、最早や一回的な場面そのものではなく、それは観察の対象になっているのであり抽象作用が行われたものである。かくして我々はこのような場面を第三者に相応しい表現をなし得るのである。

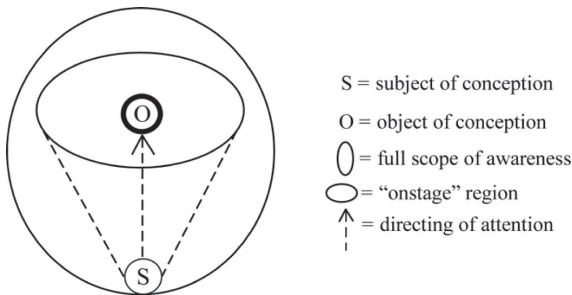
(福村 1998: 54)

これが意味するところは、主観的・主体的な経験をする場面においても、それを言語化する際には、もはや主観的・主体的な経験をそのまま言葉にはできなく、客観的・客体的にその場面を観察することによって、それを記号化しているという旨である。つまり、言語化の背景には、主客融合の状態ではなく、主客対峙の「観る・観られ関係」が基本にあって、はじめて言葉として表現されることになるわけである。

さて、次に認知言語学における主観性・主体性と言語化の関係について考察し、福村のものと対比していきたい。まず、ラネカーの認知文法では、主体性に関して、(21)のように考え、その様子は図5に描かれている。

(21) The subject (S) engages in conceptualizing activity and is the locus of the conceptual experience, but in its role as subject it is not itself conceived. Within the full scope of awareness, S attends to a certain region—metaphorically, the “onstage” region—and further singles out some onstage element as the focus of attention. This, most specifically, is the object of conception (O). To the extent that the situation is polarized, so that S and O are sharply distinct, we can say that S is construed **subjectively**, and O **objectively**. S is construed with maximal subjectivity when it functions exclusively as subject: lacking self-awareness, it is merely an implicit conceptualizing presence totally absorbed in apprehending O.

(Lanagcker 2008: 260-261)



(ibid.: 260)

図5

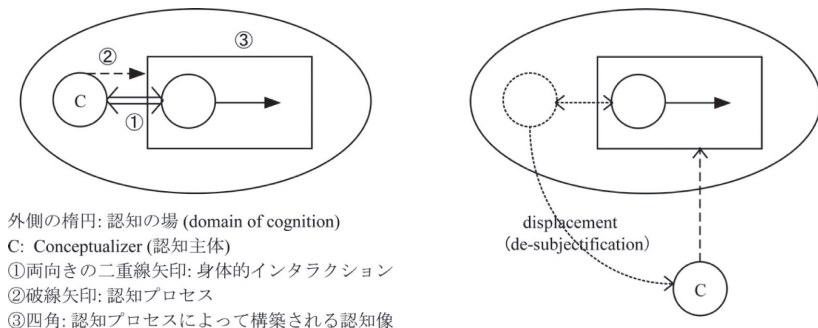
図5で示されている通り、ラネカーは観る・観られ関係(viewing relation)、すなわち、主(S)客(O)が分離した状態を原始状態として想定している。主体(S)はステージ上(“onstage” region)の客体(O)を観察するということが基本である。主体

(S)は経験をする概念主体(conceptualizer)である。この上で、主体(S)は、そこから発する「捉える(construe)」という認知プロセス(すなわち、認知の営み)(directing of attention)を通じて、客体(O)を把握することになる。1.2 節でみたように、このプロセスには「特定化(specificity)」、「焦点化(focusing)」、「際立ち(prominence)」、「観点(perspective)」などが関与する(cf. Langacker 2008)。そして、主体と客体が対極化した状態の時、ラネカーは主体(S)が主體的に把握され(S is construed subjectively)、客体(O)は客體的に把握され(O is construed objectively)ていると考えているわけである。そして主体は、主客分離した状態で事態を把握し、その捉えるという認知プロセスを通じて、観察したものを言葉として表現することになる。このように、ラネカーの認知文法では、事態の認知に関して、主客対峙の構図が基本にあるという点で、福村の言語観と異なるわけである。一方、主客分離した状態で言語化が行われるという点では、一致しているわけである。

しかしながら、全ての認知言語学者が、ラネカーのように主客分離を認知の基本と考えているわけではない。とりわけ、中村(2009, 2012, 2015 など)が提唱する「認知モード(mode of cognition)」では、福村と同様に、主客未分の状態を原始状態と想定している。中村(ibid.)の認知モードは 2 種類想定されており、それは Interactional mode of cognition (I モード)と Displaced mode of cognition (D モード)である。これらは(22)で定義(実線部が I モードの、波線部が D モードの定義)され、その様子は図 6 に図示されている。

- (22) 一つは、＜イマ・ココ＞で対象と直接触れ合い、相互作用しながら体感するような認知様式、もう一つは、対象と対峙しいわば客観的に分析的に対象を認知するような認知様式である。

(中村 2012: 286)



(中村 2009: 359, 363)

図 6

I モードでの認知は、主客未分の状態から始まり、主体(C)は対象(左図の右円)との直接的・身体的インタラクションを通じて(左図①)、主体から対象への認知プロセス(左図②)が生じることで、対象を頭の中で認知、すなわち、中村のいう“emergent image”の創発が生じる。この認知は、主体の認知を可能にする世界、すなわち、認知の場(左図の外側の楕円)で行われる。さらに、I モードは(23)に詳述される。

(23) a. [...] 認知の客体(観られる側)は、観る側 S から独立して存在するのではなく、観る側 S となんらかの存在とのインタラクションによって生じるのである。[...] 重要な点は、I モードのインタラクションによる創発という観点を推し進めると、認知主体 S ですが、何らかのインタラクションを通して創発する、ということである。この点で I モードでは、あらゆるものが相互依存的に創発し、主体も客体もはじめて存在するわけではない。このために I モードを主-客未分の認知というわけである。

(中村 2015: 590-591)

- b. I モードの<イマ・ココ>的側面に関して、次の点は強調しておく必要がある。「わたし」という概念(感覚ではなく)は、自分を自分が眺めるところのみに生じるので、<イマ・ココ>のI モードには、
「わたし」という概念は自律しておらず、この点から、I モードには認知主体と認知客体との区別が未だに成立していない(主客未分)
ということが理論的帰結として生じる。

(中村 2012: 288)

I モードでは、(23a, b)で述べられている通り、主体でさえも予め存在しているわけではなく、場面の中に溶け込み(中村のいう「癒着」)、対象とのインタラクションを通じて相互依存的に自らを回帰的に認知するため、主客未分の構図が原始状態であるということになる。

他方、D モードの詳細は(24)に記述される。

- (24) I モードの認知が本来のものだとしても、その一方で私たちは、確固たる観る側 S が確固たる観られる側 O を眺めているような気分になることもまた事実である。このように S が O に対峙するようにして O を眺めるモードが[...]D モードである。 [...] ただし、D モードは、I モード全体を反省的に眺めることもできるので、メタ認知的でもある。それは、主-客未分の I モードから、観る側である認知主体が、認知の外に出て(displacement)、観られる側だけではなく、観る側自身をも対象として眺めるということである。

(中村 2015: 591)

D モードの認知では、主体が認知の場から出て (displacement ないし de-subjectification)、その外から創発した“emergent image”を客体視する、あるいは I モード全体の俯瞰する認知の構図となっている。すなわち、中村の D モードは先に見たラネカーの観る・観れ関係に対応することになる。

さて、ここで重要なことは、中村理論では、認識形態としてIモードとDモードの2種類が想定されているものの、これらは別個のものでなく、主客未分のIモードから観る・観られ関係のDモードへの移行という過程を想定しているということである。つまり、「主客未分」のIモードから、主体が「切り出し(displacement)」(もしくは「脱主体化(de-subjectification)」)によって、主体が認知の場の外に出て、客体を傍観するという「主客分離」のDモードへ移行するというわけである。

以上が中村(ibid.)のいう認知モードの概要であるが、中村はこの認知モードと言語化に関して、(25)のように考えている。

- (25) a. [...]言語を動機づける認知的なカギは、主-客未分の認知から主-客対峙の認知への進化だということになる。

(ibid.: 590)

- b. [...]ヒトの進化のカギは<イマ・ココ>からの離脱であり、癒着的な関係(すなわち、主-客未分、自-他未分の認知)からの外置が、ヒトの進化、言語の進化のカギであろう。

(ibid.: 597)

要するに、Iモード的なイマ・ココの主客未分の認知から、Dモード的な主客対峙の観る・見られ関係のものへ移行し、自らを自らが認知できるような構図、すなわち抽象化されたメタ認知的構図によって言語化が可能になるということである。これはまさに福村の考え方と一致した見解が窺えるわけである。

以上のように、認知言語学の枠組みの中でも、主観性・主体化に関してはいくつもの考え方がある。とりわけ、主観性・主体化と言語化に関して、福村の考えと中村理論の間には親和性が見受けられる。つまり、言語化の背後には、主客融合の状態を離脱し、主客対峙の「観る・観られ関係」の成立があるということになる。

3.2 主観性・主体性と言語化のまとめ

3.1 節では、主観性・主体性と言語化をめぐる、福村と認知言語学、特にラネカーの認知文法と中村理論の認知モードを対照し、検討をすすめてきた。福村とラネカーの間には、相違点があり、福村は主客融合を原始状態として想定し、主客分離の構図へと移行することで言語化が可能となると考えているのに対して、ラネカーは主客分離の状態を出発点としているという点で相違が認められる。他方、中村理論は福村との親和性が高く、主客未分の I モードを初期状態と想定し、主客分離の D モードへ移行することで言語化が可能となるわけである。このように考えると、福村の考えは中村理論の方と親和性が高い。前で主観性・主体性については認知言語学でもいくつかの考え方があることを指摘したが、この節では、親和性が高い福村と中村理論を対照させた形でまとめておきたい。このことは表 3 にまとめられる。

	福村の言語観	認知言語学(中村理論)の言語観
主観性・主体性と 言語化	主客融合→主客分離の構図	主客未分→主客分離の構図 (I モード→D モードへの移行)

表 3

帰結として、これまでの節同様に、福村は認知言語学の台頭のはるか以前から、このような主観性・主体性と言語化に関する観念を抱いていたことになる。

4. 理論観をめぐる

前節では、主観性・主体性と言語化の関係について考察してきた。この節では、理論観をめぐる、福村のものと認知言語学、特に認知文法のものと比較し、共通点や相違点を探る。

4.1 理論観

まず、福村の理論観から考察しよう。

- (26) a. このような取り扱いは、言語を統一的に説明しようとすることが先に走って、いつの間にか現実の言語から離れていること示している。
[...] このような面に関して、「人間不在」の言語学という批判も起こるものと思われる。注意しなければならないことは、説明の過程は主として研究者の技巧的・虚構的なものであり、彼等が重要視する言語使用者の直観や能力には即していないことである。生きている人間の行為を研究対象として、しかも内的な意味を認める以上、これは忘れてはならないことであろう。

(福村 1977: 108)

- b. 限定された資料に基づいて、一般的に妥当な理論を得るためには、ある段階では、更に資料にあたることを中止して、それ迄の資料をもとにして仮説をたて、モデルを作らざるを得ず、これはやむを得ないことである。しかしあまりにも性急に仮説を立てることには注意しなければならない。次にそのモデルは新しい資料に合わなければならない。この際注意しなければならないことであるが、資料がモデルに合うように無理にそれを解釈して、あたかもモデルが新しい資料に合うので、その仮説を捨てる必要がないと主張するようなことは避けなければならない。更に現にモデルに合わないのに、異なる性質の「存在」であることを無視して仮構物を設定し、モデルに合わないのは表層だけであり、深層はそれに合うという主張は避けなければならない。

(福村 1977: 180-181)

- c. 研究対象がある仮説に合致しないとき、すぐにその仮説を捨てる必要はない。研究対象の観察自体が誤っていることも考えられるからである。しかしこの場合注意しなければならないことがある。それは対象を無理に仮説に合うように解釈し直さないことである。

次にこれと密接な関係にあつて同様に注意しなければならないことがある。つまり対象が仮説に合わないことは認めるが、それは

表面だけのことであり、内面は仮説に合っているというように考えてしまうことである。しかもその内面とされているものが研究対象であるかどうかよく考えないことである。このような場合、表面と内面が同等の次元において存在するかどうか考えなければ、研究対象の混同が容易に生じてくる。このような研究対象とそうでないものの混同、並びに、ある次元において存在するものと存在しないものの混同は避けるように心がけなければならない。

(福村 1989: 35)

- d. 言語は形態が無ければ成り立たない。したがって言語の形態について述べるとき、現実には存在しない形態をあたかも存在しているかのように述べることは正しい態度ではない。

(福村 1989: 10)

これらの福村の引用に見受けられる重要なキーワードは、「人間不在」の言語学、「説明の過程は主として研究者の技巧的・虚構的なもの」、「言語使用者の直観や能力には即していない」、「資料がモデルに合うように無理にそれを解釈」、「仮構物を設定」、「ある次元において存在するものと存在しないものの混同」、「現実には存在しない形態をあたかも存在しているかのように述べる」などである。これらの多くは構造主義言語学や当時主流の変形生成文法に向けて述べられたものである。もっとも、変形生成文法理論は人間中心の「認知科学」としての自然科学を掲げて立ち上がっているわけである。しかしながら、福村はこれに対して上掲のキーワードを挙げて疑問を投げかけているわけである。したがって、福村の理論観とは、間接的に言って、これらの概念と反するものになる。つまり、「人間中心」の言語学、「説明の過程は主として研究者の技巧的・虚構的ではないもの、つまり現実的に実在するもの」、「言語使用者の直観や能力には即している」、「資料とモデルが自然に一致する」、「仮構物を設定せず、自然に実在する道具立てを用いる」、「ある次元において存在するものと存在しないものの混同しない、(またそもそも異なる次元を設定しない

い)」、「現実には存在しない形態を述べない」といったようなものになるだろう。以上のことをまとめると、福村の理論観では、実在する観察可能な言語事実を重視すること、また、理論的仮構物を設定せず、実在する道具立てを用いて、実在する言語使用者の直観や能力を重視すること、が基本姿勢として間接的に述べられていることになる。

次に、認知言語学、特に、認知文法の理論観について考察しよう。なお、この節の議論の一部は對馬(2015)と重複する内容となることを予めお断りしておく。ラネカー(1990: 343)は認知文法の掲げる基本精神として、①naturalness(自然さ)、②conceptual unification(概念的統一)、③theoretical austerity(理論の簡素さ)の3点を挙げている。これについて、野村(2014)は次のようにまとめている。

(27) [...] 「自然さ」とは「実在論」，「概念的統一」とは言語の本質は記号的であるとし，語彙・形態論・統語論のすべてを同じ道具立てで説明しようとする「記号的文法観」，「理論の簡素さ」は「内容要件」のことを指している。

(野村 2014: 57)

ラネカーの理論観を野村によるまとめと共に考えてみたい。順不同となるが、まず、②の概念的統一とは記号的文法観に相当するわけであるから、先の議論で考察したように、言語は形態が人間の認知の営みを反映する意味の観点から何らかの点で動機付けられた記号であるということを意図している。次に③の理論の簡素さであるが、これは、野村が指摘するように、内容要件(content requirement)のことを指し示している。内容要件とは、(28)の引用で述べられているが、理論的仮構物に依らず、意味構造と音韻構造とそれからなる記号構造(そしてそれらのスキーマ化やカテゴリー化を含む)といった実際に観察できるものを理論の観察・記述対象として据えようという方針である。

- (28) [...] the only elements ascribable to linguistic system are (i) semantic, phonological and symbolic structures that are actually occur as parts of expressions; (ii) schematizations of permitted structures; and (iii) categorizing relationships between permitted structures.

(Langacker 2008: 25)

最後に、①の自然さという概念であるが、これも野村が指摘するように、実在論に対応する。ラネカーは自然さに関して(29)の引用の通り述べている。

- (29) a. [...], we must strive for naturalness in linguistic theory and description.

(Langacker 1987: 30)

- b. CG is natural by virtue of psychological plausibility, as well as the central place accorded meaning. It is further natural in that its global organization directly reflects the basic semiological function of language [...].

(Langacker 2008: 15)

- c. Cognitive Grammar is natural in the sense that it relies only on well-established or easily demonstrative cognitive abilities [...].

(Langacker 1990: 343)

ラネカーの(29)の実線部では、理論(linguistic theory)での道具立てについて自然さを求めることを述べている。特に、(29b)の心理的妥当性(psychological plausibility)というのは、理論的道具立てに対して人間の認知の営み、つまり、(29c)の認知能力(cognitive abilities)による認知の営みに動機付けを求めるということを表している。より厳密には、道具立ては、確立しているか簡単に実証可能な認知能力、つまり、実在する認知能力に基づいているということになる。他方、(29)の波線は、記述(description)に対しても自然さを追求することが表明されている。これは(29b)の波線部で述べられているように、言語体系の仕組みは記号構造を映し出すということを意味しており、ゆえにこの言語体系

は(28)でみた内容要件で指定される実在する構造体のみが記述の対象ということになる。以上のラネカーの考える自然さに関して、對馬(2015)は次のようにまとめている。

- (30) **実在性のまとめ**：①「認知能力」に基づく人間の認知の営みを利用した道具立て(理論)の**実在性** / ②言語体系の仕組みは記号構造(すなわち、意味構造と音韻構造からなる象徴構造)を反映したものを扱うという記述対象の実在性

(對馬 2015: 622)

このように、認知文法では、理論的道具立てと記述対象に対して自然さ、すなわち、実在論を求めていることになる。以上の認知文法の理論観をまとめると、②実在する観察可能な記号構造に対して、①実在する人間の認知の営みに基づく道具立てによって記述することを重視することが基本精神にあることが分かる。⁶

以上、福村の理論観と認知言語学、特に認知文法のことをそれぞれ考察してきた。両者に共通することは、実在する観察可能な言語事実を重視することや、実在する人間の直観や認知能力による認知の営みを重視するということである。裏を返せば、現実には実在しない構造や道具立てといった理論的仮構物による説明法を一切認めない方針ということになる。

4.2 理論観のまとめ

4.1 節では、理論観をめぐって、福村と認知言語学、特に認知文法を対照して検討をすすめてきた。以上の考察は表4にまとめられる。概略、これらには親和性があることが分かった。両者は、まさしく実在するものだけを用いて実在するものだけを対象とする、人間中心の真の認知科学の姿勢を擁するということになろう。これらは基本精神を対照したものであり、より詳細に検討を進めれば、それぞれの立場で言語現象の分析法や説明法が異なることは容易に想

像できる。しかしながら、大枠の基本的な精神に親和性があるということは記すに値するものである。

	福村の言語観	認知言語学(認知文法)の言語観
理論に伴う 実在性	実在する観察可能な言語事実の重視+実在する言語使用者の直観や能力の重視	実在する観察可能な記号構造の重視+実在する認知能力による人間の認知の営みに基づく道具立ての重視

表 4

また、これまでの節と同様に、福村は認知言語学の誕生以前から、このような理論観を抱き、言語研究を進めていたことになる。

5. 総 括

小稿では、福村の主著 3 部作において、「意味」に関する記述に注目し、認知言語学の言語観との比較を通じて福村の言語観を回顧した。特に、意味観、品詞論、主観性・主体性と言語化、理論観をめぐって考察してきた。この節では、これらを振り返り、総括する。

これまでの議論で考察した福村と認知言語学の言語観は表 5 の通りまとめられる。

	福村の言語観	認知言語学の言語観
形と意味	形と意味のペア(記号的)	形と意味のペア(記号的文法観)
記号の恣意性	強い恣意性	弱い恣意性(cf. 動機付け)
意味	心的作用	認知の営み
普遍性	心的作用の普遍性	一般的認知能力による 認知の営みの普遍性
意味の抽象化	抽象作用	抽象化(スキーマ化): 使用依拠モデル
品詞の定義	心的作用から規定	認知の営み(捉え方)から規定
主観性・主体性と 言語化	主客融合→主客分離の構図	主客未分→主客分離の構図 (I モード→D モードへの移行)
理論に伴う実在性	実在する観察可能な言語 事実の重視+実在する言 語使用者の直観や能力の 重視	実在する観察可能な記号 構造の重視+実在する認 知能力による人間の認知 の営みに基づく道具立て の重視

表 5

表から明らかなように、両者は多くの部分で基本精神が類似していることが分かる。もちろん、これは基本精神に関する話であり、実際の言語分析の方法論や説明法はそれぞれ異なる手法を取っている。特に、言語は心的作用や人間の認知の営みによって動機付けられているという精神は両者に共通する重要な礎となる言語観である。

福村の言語観を現代のどの理論分野に区分するのかということを議論することは本論の力の及ぶところにはない。しかしながら、敢えて指摘したいことがある。現代言語学理論としての認知言語学は欧米で 1980 年代より台頭してきたわけであるが、本論の考察から明らかなように、福村の言語観とは親和性

があり、その福村の言語観の中にはすでに認知言語学と共通する精神の萌芽が見受けられる。もちろん、認知言語学も突然彷彿したものではなく、この理論の前進は生成意味論(Generative Semantics)の一部であったとされている。福村がこうした理論から影響を受けていたかどうかということを知ることは推測の域を脱しないが、少なからずとも、福村は認知言語学が誕生するはるか以前から、現代言語学理論の認知言語学に通ずる自らの言語精神を抱き、自らの論を展開していたことは確かである。

6. 結 語

小稿では、特に「意味」に関する記述に注目して、伝統的な立場としての福村虎治郎の言語観と現代言語学理論のひとつである認知言語学、特に認知文法の言語観と対照することで、福村の言語観を回顧することを目的としてきた。特に、意味観、品詞論、主観性・主体性と言語化、理論観をめぐって議論し、両者には細かな点で違いも存在するものの、基本精神は共通するところが多くあることが明らかとなった。認知言語学が誕生するはるか前から福村は現代に通ずる自らの言語観を展開していたわけである。

いつの時代においても科学理論は突然現れるのではなく、過去の研究の集積から影響を受けながら、新たな展開を見せるものである。現代の最新理論の枠組みから研究を推進し、理論に傾倒しすぎて振り回されてしまうことを回避するためにも、適宜、その理論の背景をめぐって過去の研究を参照しつつ、理論をより深く知った上で言語事実に真摯に向き合う必要があるだろう。

<注>

- ¹ 本稿は日本英文学会北海道支部第 60 回大会語学部門シンポジウム「日本英文学会北海道支部・語学部門の 60 年 福村虎治郎を読み直す」(於: 北海道大学)(司会: 野村益寛先生(北海道大学)・講師: 水野政勝先生(北海道教育大学名誉教授)・對馬康博(札幌大学))における對馬の口頭発表に加筆・修正を施したものである。野村先生と水野先生をはじめ、コメンテーターの高橋英光先生(北海道大学)とフロアの方々から大変貴重なご意見とご指摘をいただいた。ここに記すことでお礼申し上げたい。なお、本稿に不備があるとするれば、全て著者である對馬の責任である。
- ² もちろん Bolinger はこれ以前から同様の視点から言語を分析している。
- ³ 語彙と文法を連続体と考える認知文法では、様々な単位の記号化には人間の主体的な動機づけが存在すると考えている。ここでは、単純に語レベルの議論に限定しているが、記号化と恣意性の関係のより詳細な議論は稿を改めたい。
- ⁴ 他方、同じ形態素でも、合成構造 *computer* は、成分構造 *compute* + *-er* に分析しようと思えばできるが、*computer* 自体にすでに *compute* (計算する) という以上の意味を含んでしまっている。コンピュータは計算以外にも様々な事柄を可能にしてくれるからである。したがって、*computer* は成分構造 *compute* + *-er* の部分の単純な足し算の意味ではなく、部分の総和以上のゲシュタルトの意味を確立しており、分析可能性は下がることになる。
- ⁵ 行動的環境:
「K.コフカの用語。人や動物は客観的環境もしくは物理的、地理的環境に対して行動しているのではなく、認知した主観的環境に対して行動している。そういう意味で行動を規定している環境を行動的または心理的環境という。」
(ブリタニカ国際百科事典小項目事典)
- ⁶ もうひとつ実在論に関わる問題として、経済性(*economy*)について述べておく必要がある。経済性を重視する変形生成文法に対して、認知文法ではラネカーは、下記の引用の通り、経済性が言語事実の実在性から制約を受ける旨を述べている。

“The principle of economy must be interpreted in relation to other considerations, in particular the requirement of factuality: true simplicity is not achieved just by omitting relevant facts. Questions of economy are meaningfully raised with reference to a particular body of data.”

(下線は對馬による)(Langacker 1987: 41)

変形生成文法では、第一義的に経済性を高めることが優先され、抽象度の高い一般的規則を導き、それには当てはまらない事例が生じる場合には例外として記述しようとするため、規則とリストの誤謬(*rule / list fallacy*)が発生することになる。他方、認知文法では、言語の実際の使用を重視する「使用依拠モデル(*Usage-Based Model*)」の立場を

採用するため、過度な抽象化を求めず、実際の使用事例の記述を優先し、変形生成文法では例外事例となるようなものまでを例外視せずに包括的に記述していく。したがって、経済性の問題は実際の事例に合わせた形で副次的に示されることになる。

<参考文献>

- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London/New York: Longman.
- 福村虎治郎. 1977. 『英語学論集—伝統主義と新言語学—』 東京: 篠崎書林.
- 福村虎治郎. 1989. 『英語と英語学—伝統主義と変形生成文法—』 東京: 大修館書店.
- 福村虎治郎. 1998. [1965.] 『英語態(Voice)の研究』 増補版. 東京: 北星堂書店.
- Humbolt, Wilhelm von. (亀山健吉(訳)) 1984. 『言語と精神』 東京: 法政大学出版局.
- James, William. (桥田啓三郎・加藤茂(訳)) 1998. 『根本的経験論』 東京: 白水舎.
- 中島文雄. 1939. 『意味論』 東京: 研究社.
- 中村芳久. 2009. 「認知モードの射程」 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編). 『「内」と「外」の言語学』 353-393. 開拓社.
- 中村芳久. 2012. 「認知モード・言語類型・言語進化—再帰性(recursion)との関連から—」 『KANAZAWA ENGLISH STUDIES』 28 卷. 285-300.
- 中村芳久. 2015. 「学際研究の中の認知言語学: 言語とコミュニケーションの進化」 『日本認知言語学会論文集』 第 15 卷. 588-599.
- 西田幾多郎. 2006. 『善の研究』 (講談社学術文庫) 東京: 講談社.
- 野村益寛. 2014. 「認知文法の思考法—FCG1, Ch. 1 を読む—」 『北海道大学文学研究科紀要』 142. 33-62.
- Radden, Günter and René Dirven. 2007. *Cognitive English Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*. Vol. 1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- 時枝誠記. 2008. 『国語学言論 続編』 (岩波文庫) 東京: 岩波書店.
- 對馬康博. 2015. 「人間の認知能力からみた概念化の世界観の再考」 『日本認知言語学会論文集』 第 15 卷. 622-627.